

ゆくはし 今昔物語

来年、市制 70 周年を迎える行橋市。山や海に囲まれ、京築地域の中核として人が行き交い、歴史と文化が育まれてきました。昔懐かしい行橋の風景や町なみの、「今」と「昔」をご覧ください。

～ Vol.6 鉄道のまち・行橋

明治 5 年（1872）10 月 14 日。東京の新橋から横浜間に日本で最初の鉄道が開通しました。このことを受け、毎年 10 月 14 日は「鉄道の日」に定められています。今回は行橋のまち発展の礎となった、「鉄道」について見ていくことにします。

行橋の鉄道開通は明治 28 年（1895）のこと。行橋駅は筑豊炭田からの石炭輸送の中継地として栄え、北九州や中津方面への人流・物流を担う京築地方の鉄道輸送の一大拠点でした。明治末には 1 日の乗降客は約 15,000 人に達し、弁当や牛乳、新聞などの立ち売りや売店もあり、駅前（現在の東口）では人力車 20 両が営業。また、現在安川電機行橋工場がある駅南西には鉄道院の行橋工場があり、800 人近い労働者を雇用する町随一の大工場で、大変な活況を呈していました。

1951 年 / 昭和 26 年頃 行橋機関区の全景

行橋駅には社屋のほか、機関区、車掌区、保線支区、職員宿舎、診療所など、多くの機関が置かれました。当時の花形は何といても蒸気機関車。日本では“Steam Locomotive”の頭文字から「SL」と呼ばれます。行橋機関区には「キューロク」と呼ばれた「9600 形蒸気機関車」や「C11 形蒸気機関車」などが配置されており、汽車の向きを変える転車台もありました。

中央は SL の燃料となる石炭をおいた炭台。その向こうに事務所や機関庫があります。左奥にわずかに見える森は神田町の正八幡宮。



2023 年 / 令和 5 年 行橋駅東口に展示「C11 の動輪」

行橋駅は平成 11 年（1999）に高架駅が開業し、駅の東西が一体となりました。駅東口では、平成 16 年（2004）、日本鉄道 OB 会行橋支部が創立 50 周年を記念し、「C11 形蒸気機関車」の動輪を保存展示しています。「鉄道のまち」としての往時の賑わいを現在に伝える「産業遺産」といえるでしょう。

「C11 形」の「C」とは、動輪（ピストンと連結された車輪）の数が 3 つであることを示しています。「D」は動輪の数が 4 つになります。



以前、行橋市役所の敷地内には「D51 形蒸気機関車」が静態保存されていました。「D51 形」は蒸気機関車の中でも最も多い 1,184 両もの車両が製造され、「デゴイチ」の愛称で親しまれた SL です。行橋に保存されていたのは「D51 10」と 10 番目に製造された車両で、昭和 48 年（1973）の直方機関区配置を最後に廃車となり、翌年行橋市に貸与されたものでした。しかしながら老朽化が進んだため、平成 29 年（2017）に直方市の NPO 法人「汽車倶楽部」に譲渡されました。奇しくも「里帰り」を果たしたデゴイチ。現在も継続して修復活動が行われており、かつての雄姿を取り戻すのもそう遠い未来ではなさそうです。詳細は右記の HP をご参照ください。

